

第29回
青少年の主張作文
特選作品

一人では
できないこと

坂中学校二年
木村 結菜

私が家族のやさしさに
気付いたのは苦しかった
ときだった。

小学六年生の時、私は
委員会で委員長を務め
た。最初はこうしたらよ
いか分からず、担当の先
生や副委員長と一緒に考
えていたが、そのうち一
人で考えるようになって
しまった。私は昔から人
に頼る事ができなかった。
「一人で考える方が
早い。」「これぐらいで
頼っていいのか?」とい
ろいろなことを考えては
別に大丈夫だと自分に言
い聞かせ、頼ることから
逃げてしまっていた。そ
して一人だけで頑張っ
ているうちに、たくさんの
不安をかかえてしまっ
た。そして結局、どん

に一人で時間をかけて計
画したことでも他の意見
でくつがえってしまっ
り、変わってしまった
した。人をまとめること
の大変さを知った。
あの時私は全部一人で
かかえ込まないといけ
ないのだと思い込んで
いた。周りは助けてくれ
ないのだと本気で思っ
ていた。毎日くるしく
泣いていた。

そんな時、姉が何
度もなぐさめてくれた。
元氣を出すよう励まし
て、手伝おうとしてく
れた。また、母が他の
案を出してくれて、一
人でかえ込んでしま
う私を怒ってくれた。
それが私にとっての救
いだった。さだと気付
いたのだ。それから
それが優しさだと支
えられながら頑張っ
ていた。大きな長
方形の紙をくれた。
それは「唯一無二の
私の妹、生まれてき

れてありがとう」とい
う言葉の絵が描かれて
いた。こんなに優しい
言葉は初めて嬉しく
て私は泣きそうだっ
た。これも家族から
の優しさだったのだ。

ほかに、私は家族に
助けられた日がたく
さんあった。例えば、
授業で広島県にある
市について調べたこ
とを新聞に書くとい
うのがあった。その
時私は尾道市を選
んだ。パソコンや本
で調べようとしたと
きに、母が「尾道市
に直接行ってみない
と分からないこと
が絶対あるよ!」と
言った。まさか行く
とは思っていなかった
からびっくりしたけ
ど、ほんとに知らない
ことがたくさんあ
った。尾道の、背
脂の乗ったラーメン
や未来心の丘、耕三
寺などいろいろなこ
とを経験した。未
来心の丘のまぶしい
純白さや自然に
とけこんだ神秘さは、
現地に行かないと
分からない。また、
本やインターネット
だけでは伝わらな
いことがたくさん
分かった。

た。あの新聞は、母
と父が連れていって
くれた。思ったより
できなかったと思
う。

私はいろいろなこ
とを自分一人で頑
張っていると思っ
てしまふときがあ
る。だけど違う。気
配いいないだけで
たくさん人の助け
を受けているのだ。
言葉で助けてくれ
たり、行動で助け
てくれたり、く
さんのことをし
てくれていると思
う。それに気付
かないのはもっ
たいないと思う。
大切な人を傷
つけてしまふ。周
りに仕事を押し
つけている人、一
人だと思ひ込
んでいる人に周
りの人が助けて
くれているとい
うことを知って
ほしい。私は人に
頼ることが下手
で、かかえ込
んでしまふ。う
くせがある。でも
周りの人が知ら
ず知らずのう
ちに守ってく
れている。だ
からこそ、今
度は私がその
人たちを守
りたいと思
う。これからも
一人だと考
えてしまふこ
とがある。そ
のたびに周
りのやさし
さに気付

何とかなる

坂中学校 三年
池田 美結

私は中学二年生、い
わゆる「思春期」です。
思春期には、悩みを抱
きやすくなる、テレビ
で耳にしたことがあ
ります。生きている
上で、悩みという
ものは尽きませんが、
特に思春期は、心身
ともに成長が進む時
期であり、その過程
で悩み、不安などを
抱きやすくなるこ
とです。

その時私は、その「
悩み」に、どう向き
合っていくべきか、
疑問が生まれました。
誰もが一度は悩みを
抱きますが、そこ
からどうやって解
決へと導くのか、
どうやって向き合
っていくべきか、
良いのだらうと思
いました。もちろん
私にも悩みはあり
ます。人間関係、勉
強、部活動、将来
や進路など、自分
が生きてきた

中で、今が一番多く
の悩みを抱えている
と感じます。中
学生になって表
彰やテストの成
績など、評価さ
れる場面が多
くなり、他人と
の比較をして
しまいます。ま
た、先輩、後
輩などの上下
関係も出て
きて、ストレ
スをためこ
むことも増え
てきました。

そんな悩みが
できたとき、
私はどのように
向き合い、解
決へと導くた
めに何をし
ているのだろ
うと思ひ返
してみまし
た。すると、
意外にも私
は悩みが
できたとき、
あまり解決
しようと思
っていない
ことに気が
つきました。
以前は悩み
や不安があ
ると、「解決
しない」と
考えるのが
普通でし
た。でも、
私はある
言葉と出
会ってから、
悩みを解
決につな
げようと
することが
減りました。

「何とかなる。」「
これが私
にとって大
切な言葉
です。」「何
とかなる」
とは、結
果がどう
なっても
どうにか
乗りこえ
られると
いう私な
りの考え
方です。私
はもとも
と何事にも

ガティブな考
えを持って
しまうので、
悩みという
存在が自分
の歩を止め
るおもりと
なり、解決
へと導くこ
とができま
せんでした。
しかし、「自
分はダメだ
な」と考
えるより
も、「何と
かなる」と
考える
無理に解
決しようと
しない方
が、前向
きに、ポジ
ティブに
物事を考
えられ
るよう
になり、
自然と
自信が
ついま
した。私
が一人
で抱え
こんで
いた悩
みは、「何
とかなる」
という
言葉に
よって
視野が
広がり、
今まで
見えな
かった
ものが見
えてく
るよう
になり
ました。

人によって
生き方は
様々で、抱
く悩みも
様々です。
自分にし
か分から
ない悩み
などあり、
人によ
って向き
合い方は
異なり
ます。し
かし、私
は「悩み」
という存
在にと
らわれず
に、時に
は「何と
かなる」
とポジ
ティブに
考えるこ
とが、私
にとって
良い悩
みとの向
き合い
方である
と分か
りました。
今はま
だ中学
生で、大
人になる
ための

インターネット
について

坂中学校 三年
平賀 花

準備期間
であり、大
人になる
とさらに
今より多
くの悩み
や不安が
出てくる
と思ひ
ます。そ
の中で、
「何と
かなる」
という考
え方を
常に持
つ。それ
によ
って「悩
み」を、
自分
の歩を
止める
おもり
にする
のでは
なく、自
分を進
めてく
れるエ
ンジン
に変
えて、
常に
前へ進
んで
いき
たい
です。

今、世界中
で使われ
ている
もの。生
活には欠
かせ
ないもの
であ
って私
達のす
ぐそば
にある
もの。そ
れは
インター
ネット
です。世
界中の
情報
が日本
に集ま
って
くる中
で、その
情報
は私達
でも制
限なく
簡単
に見
られ
るよう
にな
って
いま
す。自
分にと
って
必要
な情
報も
必要
でな
い情
報も
全て
が得
られ
る便
利な
時代
だと
感じ
ます。
母は私
にスマ
ート
フォ
ンを
持た
せた
とき、

「正しい情
報の選別
をしつ
かりし
ないと
困る
から、
何でも
信じ
すぎ
ちゃ
ダメ
だか
らね。」
と
言
いま
した。
正しい
情
報の
選別
とい
うもの
がど
のよう
なこ
とか
あ
まり
深
くは
考
えて
い
な
か
った
の
です
が、
今考
えて
み
ると
それは、
情報
社会
であ
る現
代に
は必
要不
可欠
なこ
とだ
と思
いま
す。な
ぜか
とい
うと、
正しい
内容
だと
信
じて
いた
もの
が実
は根
拠の
ない
話だ
った
り伝
える
側の
工夫
次第
で見
方
も大
きく
変
わ
った
り
す
る
から
です。
さら
に、
その
よう
なこ
とで
巻
き込
まれ
るト
ラブ
ルも
増
え
てい
ま
す。ま
た、
その
情報
を鵜
呑
みに
して
しま
った
場合
に困
るのは
自分
達で
、生
活に
も影
響を
与
える
可
能性
が十
分に
あり
ます。

そこで、情
報を得
て、活
用する
こと
で暮
らし
が豊
かにな
って
いる
私達
はど
のよう
にし
てイン
ター
ネッ
トと
付き
合っ
てい
くべ
きか
考
え
まし
た。そ
の時
思
い出
した
のが、
母が
言っ
てい
た「情
報の
選

別」でした。
選別とは選
び分けるこ
とです。根拠
を探し、情
報を発信し
た人の意図
を読み取る
ことができ
れば、その
情報の信頼
度が大きく
変わります。
最終的にそ
の内容を活用
するかしな
いかを選
びます。実
際、専門
的な話を
知ろうと
する場合、
周りが正
式に認め
た事実か
ら話を深
めていた
り、発信
者が専門
的な資格
を得てい
たりする
と、内容
の正確さ
が一気に
増します。
医療や食
などの情
報は信憑
性が高い
話ほど、
必ず根拠
がついて
います。

そして、情
報は知る
以外にも、
共有しあ
うこと
で活用
するもの
もあり
ます。そ
の時に
必要と
考
え、信
じすぎ
ないこ
とと、
受け入
れるこ
とで
す。イン
ターネ
ットと
い
う壁を
挟んで
の会
話は一
瞬の場
面しか
切り取
られ
ません。
嘘の話
であ
っても、
ばれな
ければ
いく
らでも
発信
でき
てしま
いま
す。そ
の一
つの
情報
に惑
わさ
れて
信
じて
しま
った